

巻 頭 言

昨年5月に秋田市で開催された第7回初夏研究会において、佐伯卓也会長の後を受けて会長に指名され、11月に山形で開催の第35回年会において承認されました。その際、副会長には尾崎康弘氏(八戸工業大学)の他に、板垣芳雄(前宮城教育大学)、森川幾太郎(山形大学)の両氏がなられ、森川氏の後の事務局長を大澤弘典氏(山形大学)がされることになりました。よろしくお願ひ申し上げます。

個人的なことを申し上げますと、私は70歳を一応のめどとして学会から退きたいとの意志をもってきました。既にPME-Japan(副会長・会員とも)から退き、日本数学会、日本教科教育学会他を15年度をもって退会する手続きをとりました。地域的な学会等には事情もあり、この意志の発動を少々留保しているところです。

米国の大学では老害が深刻であるとも聞いています。年をとると若い時とは心身共に違ってきます。研究会でも昼食後は相当な時間を休息しないと睡魔が襲います。実は、興味・関心が極めて選択的となっているのです。興味を引く図書、論文、発表には睡魔は全く顔を出しませんし、夜中でも目が覚めます。昔の知者が奨めるとおり、思うままに暮らすのがよく、むしろそれしかできません。

目が覚める研究発表が今年度の年会にありました。佐々木哲(秋田大学科学教育研究室研究生・横手南中学校)と杜威(秋田大学)の両氏による『数学史を活用した教材開発の視点と教材作成について』、及び森川幾太郎氏(山形大学)の『アメリカにおける加減算の教育—Kamiiとその周辺の人々による提案—』の二つでした。

面白い研究に出会うと、その研究が基づく文献に当たることにしています。今回のその一つは塚原氏の『数学史をどう教えるか』(東洋書店)です。視点と研究遂行力とに感心しますが、教育原理的側面に弱いです。この側面の研究は未だ残されています。(本図書文献欄中のZDMは学術雑誌ではありません)もう一つはK..Fuson他(1997)『Children's Conceptual Structures for Multidigit Numbers and Methods of Multidigit Addition and Subtraction』JRME 28,130-162.で、これには目が覚まされました。そこで、秋田で結成している「如月会」で『泥沼の英米算数計算指導』と題して2月7日にこの論文を紹介しました。

関心の有り様は様々でしょうが、学会では興味・関心に合致する研究・実践と、助け合い、刺激し合える友にきっと出会えるでしょう。本学会を核として算数・数学教育の実践・研究を一層推進したいものです。

湊 三郎 記